朝日新聞　奈良版

朝日新聞　2005年(平成17年)7月5日　火曜日　13版

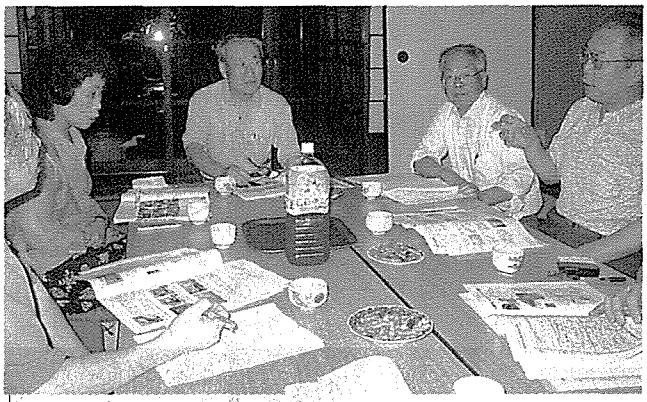
高齢者も参加 緊急避難シミュレーション

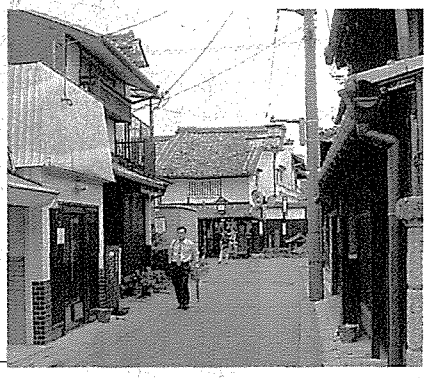
安全・安心なまちへ提案

「奈良町」中新屋町の研究会

お年寄りも参加して緊急避難のシミュレーションをしてみよう――。古い木造の町家が多い奈良市の「奈良町」中心部、中新屋町の住民らによる研究会がこんな提案をまとめた。高齢化が進む町の防災・防犯対策を練り直そうと、町内の独居高齢者からの聞き取り調査などを1年前から実施し、パンフレットにまとめて住民に配る予定だ。中新屋町自治会は「安全・安心のまちづくりの出発点にしたい」という。

同町には30世帯余り約80人が住み、65歳以上の高齢者の割合は約30％と高い。町家の多くは間口が狭くて奥行きが長い「うなぎの寝床」。6、7年前に死者を出す火災が2件続き、住民は「密集した住宅地で、家の裏側は塀でふさがれ、表側が火に包まれれば逃げ場がない」といった不安を感じていた。





㊤町内の防災・防犯対策を話し合う住民たち＝奈良市中新屋町の奈良町物語館で
㊦木造民家が狭い道路に面している町並み＝奈良市中新屋町で

「宿題」パンフに 配布予定

そこで1年前、自治会と町内にある社団法人奈良まちづくりセンターの理事ら計13人が、「奈良町の安全・安心・快適な住まい&まちづくり研究会」を結成。消防団幹部や警備の専門家を招いて勉強会を開いてきた。

80歳以上の独居高齢者3人に緊急時の連絡先や避難路の確保などについて尋ねたところ、「市内に住む息子に電話する」「裏のブロック塀を乗り越えて逃げる」との答えだった。研究会メンバーからは「親族が駆けつけるには30分以上かかる。町内にも連絡先が必要だ」「お年寄りが1・5㍍の塀をよじ登るのは無理。隣地との間に避難扉を設けるべきだ」との指摘が相次いだ。

一方、戦時中に空襲対策として隣家の敷地へ避難する非常口が作られたケースもあり、「こうした経緯を子孫に伝え、新たに建物をつくる場合に配慮しなければ」という意見もあった。

研究会はこうした成果を「中新屋町プロジェクト」という8㌻のパンフレットにまとめ、住民や周辺自治会に配る計画だ。中川俊彦・中新屋町自治会長は「町としての宿題をもらった感じだ。住民に集まってもらい、具体化したい」という。

研究会のまとめ役の建築家、上嶋晴久さんは「年齢を重ねるにつれ自治会活動への参加が少なくなる傾向もみられた。近所同士で、いざという時の避難路を実際に確かめ合うなどすれば、コミュニケーションが深まって防犯対策や急病時の対応に生かせるのではないか」と提言している。